

UNIRITA

Magazine

ユニリタマガジン

10
2018

業務課題解決ソリューション

現場の経営情報可視化ソリューション

～分断・断絶された経営情報をクラウドサービスで統合し可視化～

業務課題解決ソリューション

今更聞けない、RPAの本質とは？

～手段を目的化させず、本来の目的を達成するために～

製品&サービス最新トピック

タブレット・スマホ向けアプリ 「Motacell -もたせる-」のご紹介

～プッシュ型の情報共有アプリでファイル共有の新しい形を実現～

システム管理者の会

システム管理者認定講座を受講しよう

UNIRITAユーザ会

第143回マネジメント研究会開催報告

セミナー紹介

データ総研 特別開催セミナー 2018
「悩んできたからこそわかる
データマネジメントの実践に必要なコト」

パートナー様ご紹介 株式会社アイネス

SAPのデータ活用ソリューション
マスターデータの整合性UP！
～データ活用実現～

ユニリタ
イメージキャラクター
ホラン千秋





現場の経営情報可視化ソリューション

～分断・断絶された経営情報をクラウドサービスで統合し可視化～

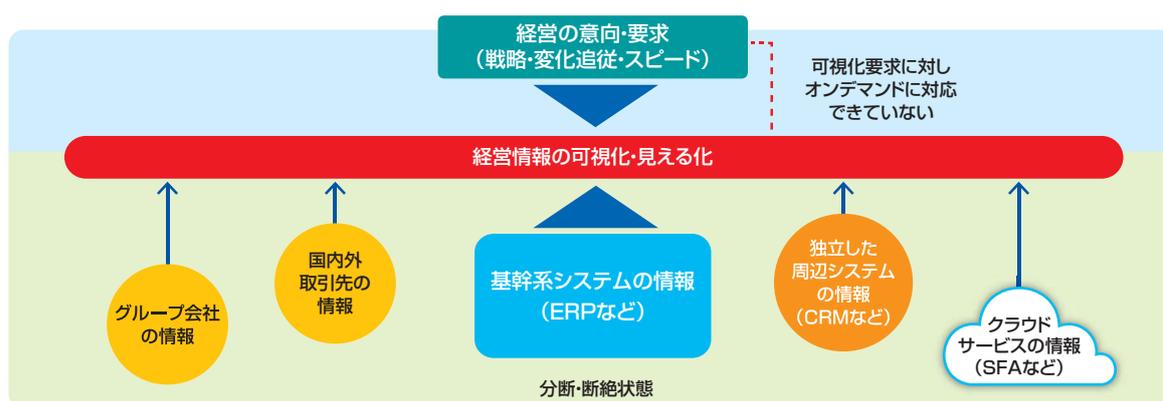
経営情報の可視化や見える化は企業活動において適切な判断を下したり、行動の意志決定をするために必要とされ、これまでも多くの企業がDWHやBIといったITを活用し「自社にとってより理想に近い経営情報可視化・見える化」の実現を目指してきました。

しかし現在のように企業を取り巻く環境が大きく変化する中で、以下のような要因により必要とされる情報ソースは多様化と複雑化の一途をたどり、情報の分断・断絶が発生しています。



このような問題により、経営が求める「経営情報の可視化・見える化」の要求に対し、現場部門は対応できておらず、情報提供までに時間がかかり、結果として提供する情報の鮮度と精度が落ちてしまうという課題があります。

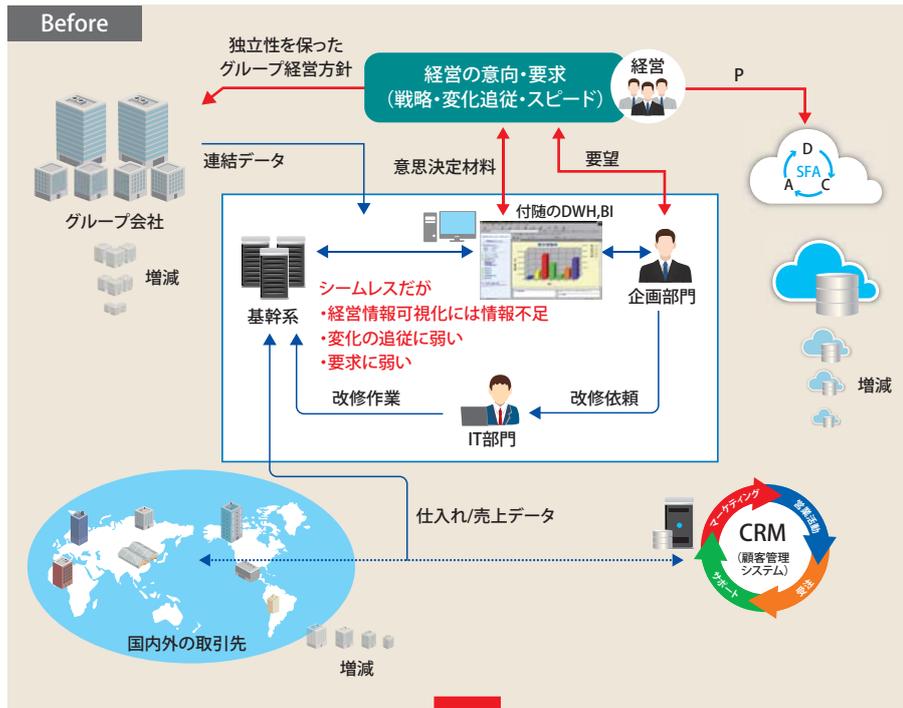
本稿では、このような課題に対し、分断・断絶された情報の統合を自動化し、そのデータをもとに分析や帳票作成などを行うレポート機能を持つクラウドサービスを提供することで、多様化する情報と経営の要求に対し、迅速かつ正確に対応することができる、現場の「経営情報可視化ソリューション」を紹介します。



⇒ 分断・断絶された情報を統合するメリット

- 情報が横串で見えることによる最も有効な施策への気づき
- KGIとKPIが連携した先行管理にシフトできる
- 長期、中期、短期の取り組みに一貫性が生まれる
- 想定外の情報も取り込み、活用できる
- 経営や環境の変化に迅速に追従できる
- 意思決定スピードが向上する

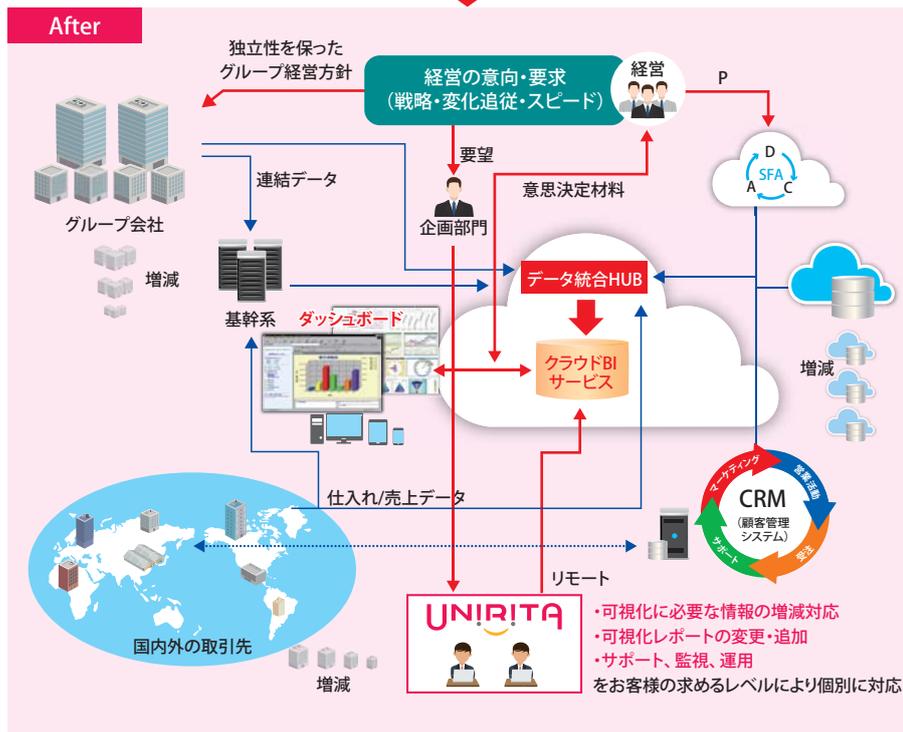
現場の経営情報可視化におけるケーススタディ



過去に構築した【経営情報可視化システム】の問題

- 意思決定のための判断材料が少ない(可視化度低)
- グループ会社の増減にスピーディに対応できない(柔軟性低)
- 国内外の取引先情報はそれぞれのシステムで管理されているため、活用されていない
- SFAの情報が経営情報可視化に活かされていない
- 経営や環境の変化に柔軟に対応できない
- PC以外での情報端末で活用できない(利便性低)

財務会計の情報は正しく可視化されるが、先行管理としての「経営情報可視化」は実現できていない状況



適用後の効果

- 効果1 情報の分断・断絶がなくなり、意思決定の精度向上と時間短縮を実現できた
- 効果2 経営情報可視化のための情報ソースの増減に対して「データ統合HUB」により、柔軟に対応できるようになった
- 効果3 経営方針・環境の変化に伴う可視化要求をオンデマンドにユニリタが対応するため、「改修対応の技術者を置く必要がない」上、短期間で要望を実現できた
- 効果4 クラウドでの提供であり、運用・監視のコストも大幅に削減できた
- 効果5 クラウド化により、PCだけでなく、モバイルに対応することで、場所・時間に縛られずどこからでも利用可能で、海外出張の多いボードメンバーにも好評

まとめ

ユニリタは、ITの現場の声に耳を傾け、お客様の要望を実現するソリューションの提供を心掛けています。今回紹介した現場の「経営情報可視化ソリューション」はもとより、他にもお客様が抱えている課題、要望など、なにかお困りのことがございましたら、ユニリタの担当者までお気軽にご相談ください。

お客様と一緒にソリューション(解決策)を検討させていただければと考えています。

⇒ ユニリタだからできるクラウドサービスでの現場の「経営情報可視化ソリューション」

- 利用するソフトウェアはすべて自社製品であり、月額料金での利用が可能です。
- システム構築だけでなくクラウドを利用するためのネットワーク環境の運用まで経営情報可視化システム構築に必要なサービスを提供します。
- 提供するサービスは、お客様の要求レベルにあわせて選択可能なので、オーダーメイドのような経営情報可視化システムを構築できます。

サービスレベル	ユニリタの経営情報可視化ソリューション
1	現行経営情報可視化システムのクラウドサービス化
2	自動監視および通知 バックアップサービス
3	有人監視 情報ソース増減/可視化条件オンデマンド対応
4	24時間365日 完全業務アウトソーシング

担当者紹介



取締役 常務執行役員
ソリューション事業本部長
秋山 泰

今更聞けない、RPAの本質とは？

～手段を目的化させず、本来の目的を達成するために～

現在、RPA(Robotic Process Automation)がブームの様相を呈しています。このような状況下においては、得てして「手段」(ここではRPA)が「目的化」してしまい、本質が見失われがちです。RPAは、ITツールにもかかわらず、IT部門発ではなく経営レベルからの要請によって取り組んでいる企業も多いのではないのでしょうか。このような現状を踏まえ、RPAの本質を捉え、本来の目的を明確にし、成果を導出するためにユニリタグループが考えるRPAソリューションをご紹介します。

⇒ RPAの本来の目的とは何か？

「働き方改革」が時代の要請になっています。

- ・業務改革やITの活用によって、労働時間(残業)を減らし、余暇の増加による豊かな生活
- ・時間や場所にとらわれず仕事をするロケーションフリー、テレワークの実現
- ・誰でもできる作業(可視化され、形式知化されていることが前提)をITによって自動化し、「人(ヒト)」でなければなしえないクリエイティブな仕事へのワークシフト

など、さまざまな「働き方改革」の考え方があります。

RPAはこれらを実現するための手段の1つですが、決して魔法の杖ではありません。

現在のRPAはロボットという名前がついているものの、日本人が想像するようなSFの世界で描かれているロボットとは程遠く、床を掃除するロボットとそれほど変わらないといえます。

今後、AIなどの技術革新が進み、自律型のロボットも近い将来現れると思いますが、現時点ではRPAツールと呼ばれる「ソフトウェア」上に、プログラミングによるRPAシナリオ「ロボット」を作成し、指示したとおりに動作させるに過ぎないのです。

しかし、RPAツールが有効なソリューションであることに変わりありません。

RPAを含むITソリューションは、働き方改革の手段であり、目指すものは何かを明確にして、活用していくべきと考えます。

今後推進していくにあたって、目的はあくまでも「働き方改革」や「ワークシフト」の実現であり、現状のRPAができることを経営層や関係者に正しく伝え、過度な期待を抱かせない合意形成が必要です。

また、成果の指標は単にコスト削減だけではありません。品質の向上や、納期の平準化、短縮といったいわゆるQCDCにかかる目標を掲げ活動することをお勧めします。

つまり、RPAツールの効果は費用対効果だけでは測れないこともあり、「作業」を代行してくれるロボットを新たに雇用したと考えるべきです。

⇒ RPAの概念とRPAツールについて

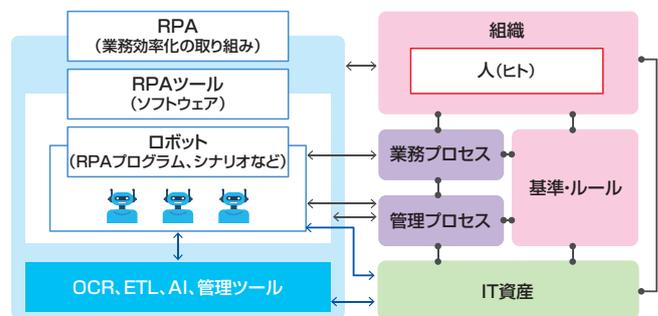
WikipediaでRPAを調べてみると「認知技術(ルールエンジン・機械学習・人工知能など)を活用した、主にホワイトカラー業務の効率化・自動化の取り組みである」^{※1}と定義されています。

RPAツールは「人」の作業を代行することができます。人の代行とは言っても、ソフトウェアである以上、「気を利かせる」、あるいは「臨機応変

な対応」はできません。残念ながら、ロボットという言葉から連想される万能ツールではなく、現時点の技術では、可視化され、形式知となった業務プロセスにのみ適用できるのです。

また、「人」の業務を代行するという観点からすると、RPAツールにも人と同じレベルの基準やルールを適用していく必要があります。

RPAを概念として広義に捉えた場合、RPAツールだけではなく、OCRやETLなどの仕組みやAIと組み合わせることで、より効率的なソリューションとすることができます。なぜならば現状のRPAツールには得手、不得手があるからです。例えば、大容量データの処理時に十分なパフォーマンスが得られない場合や、紙や手書きの情報をデジタル化するという場合です。



また、RPAツールはあくまでもソフトウェアであり、ロボットというプログラム(シナリオ)を作成し、稼働させるわけですから、効率的な運用のためには、管理するプロセスや業務プロセスも定義しておく必要があります。

⇒ RPA活用に向けた3つのポイント

① RPAは複数のツール群で実現する

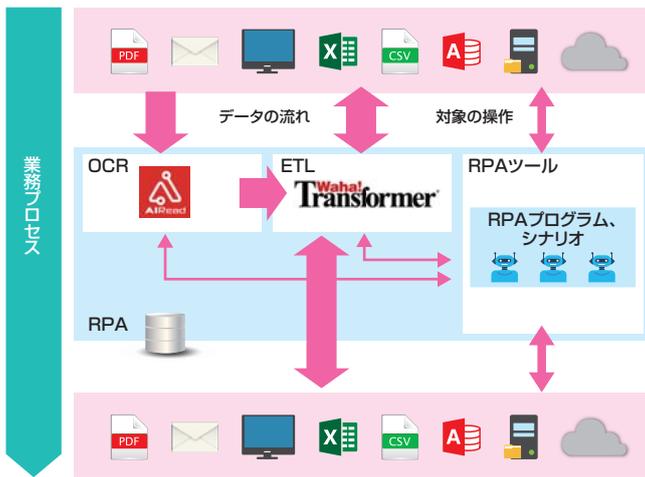
RPAツールは万能ではありません。人の代行ツールとしてさまざまな機能を有していますが、すべてをRPAツールで実装しようとするとさまざまな制約があります。

まずは業務プロセスそのものを理解し、システム化や、パッケージの利用、業務プロセス改革などの手法を活用して本来の目的である自動化・効率化の実現を目指すべきと考えます。

例えば、一般的にRPAツールで大量の処理や大容量のデータ処理を行う場合には「人」と同じ動作をさせるとパフォーマンスが出ません。また、「手」としての機能はありますが、「目」としての機能はありません。

そこで、高速大容量処理を実現するETLツール「Waha! Transformer」

※1 「ロボティック・プロセス・オートメーション」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』。2018年09月28日(金) 21:19 UTC、URL: <http://ja.wikipedia.org>



「RPAソリューション」を構成するツール群
 O C R : AIRead (アライズインバージョン)
 E T L : Waha! Transformer
 RPAツール : WinActor(NTTデータ)など
 管理ツール :
 ITSMプロセス管理 LMIS on cloud
 ロボットのスケジューリング A-AUTO
 稼働監視 Mr.CIO
 RPAにかかる、組織設計、管理プロセス設計や
 運用管理規程などのコンサルティングサービス
 (BSPソリューションズ)
 ※ ()は開発元です。
 ()の無いものはユニタの製品&サービスです

や、紙や手書きなどのアナログ情報をデジタル化するOCRとRPAツールを連動させることによって、自動化・効率化を実現します。

また、RPAツールを運用する際の体制や組織、管理するためのプロセスを整備していく必要があります。

体制や組織の整備がないまま、現場で五月雨式に導入してしまい、結果的に手戻りが発生し、多くの工数を要しているというお声も耳にします。RPAの運営における有効な管理手法としてはITサービスマネジメント(以下、ITSM)のフレームワークであるITIL®が有効であり、このプロセスを実装した、「LMIS on cloud」の活用も有効です。

②変更管理プロセス、運用設計が重要

RPAツールによる「ロボット」は、人の代わりにIT資産(システム)を操作するため、外部要因の変化に弱く、操作対象になんらかの変更がされた場合、正しく動作しない可能性が高くなります。

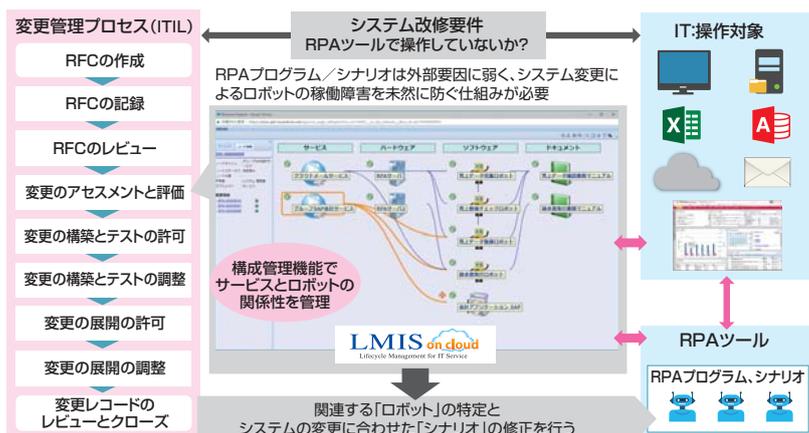
例えば、システムの変更や改修について、ロボットが操作対象としている画面構成が変更になった場合、人であれば推測や予想によって対応することができますが、ロボットではそうはいきません。

この場合、システムの変更や改修におけるリスクを最小化する変更管理プロセスにおいて、ロボットの動作不良リスクを最小化するプロセスを組み込む必要があります。

システム改修や変更などの要件が発生した場合、変更管理プロセスにおける、「変更のassessmentと評価」のステップで、当該IT資産(システム)を「操作」している可能性のあるロボットを特定し、改修できるようにしておかなければなりません。

システムそのものの変更だけでなく、テストやリリースの各段階においても、ロボットも同期して対応することで、各々の変更リスクを最小化することができます。

下図にITIL®の変更管理プロセスとロボットとの関連性を示します。ITSMツール「LMIS on cloud」の構成管理機能を活用して、整合性を担保し、リスクを最小化することができます。



③「作業」と「仕事」を分ける

RPAを適用する業務プロセスにおいて、「作業」と「仕事」を分析し、どの作業をRPA化するかを明確にしていく必要があります。現在のRPAツールには、自律的な意思決定や判断する機能はありません。

業務プロセスを分析し、「作業」を明確にし、RPAツールに実装していく必要があるのです。

内部統制の観点からも、「承認」や「なりすまし」に該当するような作業をRPAツールに実装してはなりません。

悪意を持ってロボットを稼働させることがないよう、明確なルールやガイドラインを定め、開発・構築にあたり、モニタリングの仕組みを構築しておく必要があります。

「作業」の例

- 内向き作業
- 頭を使わない(判断がない)
- 結果に向かう活動
- 手順が明確である

「仕事」の例

- 外向き、アイデアの創出
- コミュニケーションが必要
- 判断や思考によるアウトプット
- 結果を出す

まとめ

RPAブームが、これまでもあった多くのITにかかわるブームと大きく異なるのは、IT部門や情報システム子会社ではなく、企業の経営層や事業部門の関心が非常に高いことです。

世の中の「働き方改革」の流れもあり、業務効率化の切り札として脚光を浴びています。

しかし、これまでのITブームと同じなのは、手段が目的化してしまい、成果の設計をしないまま、ツールを導入してしまうことによって、本来の目的が見失われてしまうことです。

そんな中、IT部門は何をするべきか。

IT部門は、ITの専門家として事業部門の期待に応えるチャンスです。RPAの本質を見極め、「働き方改革」の実現に向けて、RPAという概念を活用し、事業部門の業務プロセスを改革するためのツールや各種ソリューションを提供するべきと考えます。

ユニタグループは、RPA導入に関するコンサルティングから各種ソリューション提供まで、幅広いサービスをご提供しています。

お気軽にご相談ください。

担当者紹介



株式会社ビーエスピーソリューションズ
代表取締役社長
藤原 達哉

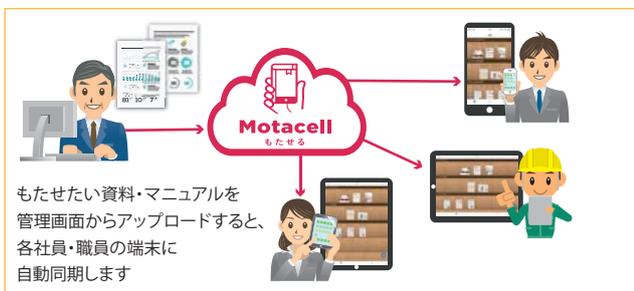
タブレット・スマホ向けアプリ「Motacell-もたせる-」のご紹介 ～プッシュ型の情報共有アプリでファイル共有の新しい形を実現～

「Motacell」は、必要な情報をプッシュ型でもたせることができる情報共有アプリです。

災害マニュアルや連絡網など、全ての従業員がもつべき情報の配信や、タブレットを活用した営業活動、各種マニュアルの電子化、会議資料のペーパーレスを実現します。

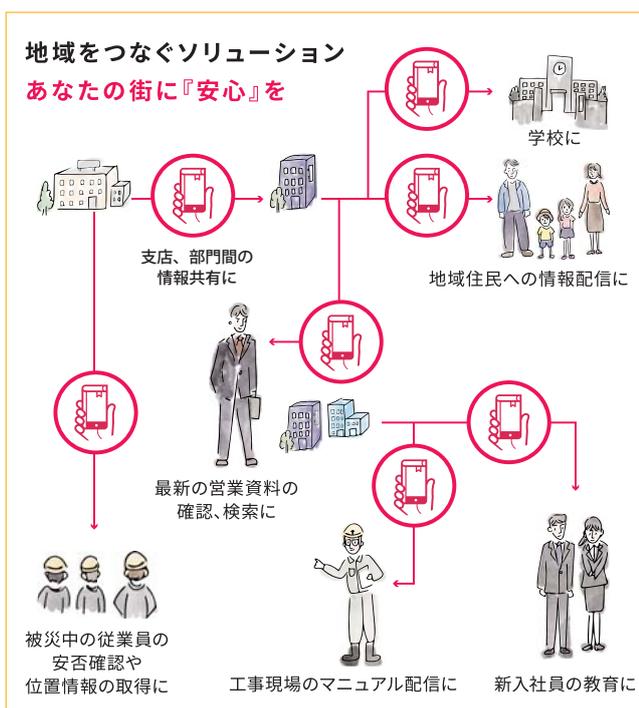
「取りに行く」情報共有から 「もたせる」情報共有へ

従来の情報共有アプリは、ユーザが自ら、ファイル共有サーバなどから情報を取得する、いわゆるプル型のシステムでしたが、「Motacell」は、情報配信者である「もたせたい側」が「アプリ利用者」に情報を配信するプッシュ型の仕組みを実現し、社内の情報共有をスムーズにします。



さまざまなユースケース

「Motacell」は、「企業と従業員」、「企業と地域」、「学校と生徒」など、さまざまなケースで利用することができます。意識しなくてもファイルやメッセージ情報を配信することができるため、配信者は資料配付の手間を、利用者は資料取得の手間を削減することができます。



課題1 紙での資料配付が大変!

ページ数の多い資料や頻繁に更新される資料を印刷して配布すると、印刷コストだけでもかなりの負担になります。それだけでなく「必要な部数を印刷する」「全員に配布する」「不要になったものを適切に破棄する」などの手間もかかります。

→「Motacell」ならこれで解決!

スマホに最新の情報を一括配信できるため、印刷・配布が不要になりコスト削減効果も期待できます。

課題2 災害時にこそ手元でマニュアルが見たい!

電子マニュアルは持ち運びに便利ですが、地震などの災害時にはネットワーク環境が不安定になりがちです。クラウドサービスや自社サーバにマニュアルを保管していると、せっかく用意していてもいざという時にマニュアルにアクセスできず、閲覧できない可能性もあります。

→「Motacell」ならこれで解決!

スマホに最新のマニュアルがダウンロードされるので、持ち運びに便利だけでなく、いざという時にすぐ大事なマニュアルを閲覧することができます。

このように「Motacell」は、情報の配信側からプッシュ型で情報を配信することで、重要な情報の取得漏れを防ぐことができます。それだけでなく、最新の情報を自動的に配信することで、情報の鮮度と品質を継続的に維持ことができ、情報共有のコストや業務負荷を改善することも可能です。

また、ビジネスシーンだけでなく、地域や学校などへの情報発信など、さまざまな場面、状況で活用できます。

「Motacell」にご興味のある方は、ぜひお問い合わせください。

株式会社ビーティス
お問い合わせ先 TEL:03-6690-5852 E-mail: btssales@bitis.co.jp
https://info.bitis.co.jp/motacell

担当者紹介



株式会社ビーティス
新規事業開発部
部長
佐藤 龍

システム管理者の会は、さまざまな人材育成活動を実施しています。中でも、ITシステム管理者向けの認定資格が取得できる講座として開講している「システム管理者認定講座」は、2011年より経済産業大臣認可、全日本能率連盟登録資格の認定を受けて、今年で8年目を迎えました。皆さまの会社における受講状況はいかがですか？累計合格者 900名・受験者数1,500名を超える人気セミナーです。下期の社員教育に、ぜひともご活用ください。

SysAdmin's
Group



グループワークが多いユニークな講義が特徴

本講座では、知識のみではなく体験の中でスキルを習得できるように、グループワークやディスカッションを多く取り入れています。受講を機会に社外の人と交流し、業務内容などの情報交換や知見の共有が行えます。このように、他社の運用現場の方が集まり情報の交換や共有ができるのは、貴重な機会かと思えます。

また、システム管理者としての技術的な内容だけでなく、組織で働くビジネスパーソンに求められる「ヒューマンスキル」も講義しています。

合格後のフォローアップがあります

また、資格取得後のフォローアップとして、年に2回「アップデートミーティング」を開催しています。このイベントは資格取得者が集い、ITシステム運用に役立つ最新情報を学びながら、再び語り合う場として開催しています。直近では、9月7日に「QA対応のためのチャットボット導入設計」を体験し、自社に活かせるか議論を行いました。次回は2019年2月を予定しています。

今年度の開講予定

今年度の開講も残り半分となりました。直近では、10-11月の受講者を募集しています。満員御礼で受付を早期に締め切る日程もございますのでお気をつけください。

1,000人目の合格者はあなたです！会場でお会いできることを楽しみにしています。

認定講座開講日程[初日]

初級コース D日程	2018/10/2 (火)
上級コース B日程	2018/10/3 (水)
中級コース D日程	2018/10/10 (水)
初級コース E日程	2018/10/31 (水)
中級コース E日程	2018/11/6 (火)
初級コース F日程	2019/1/15 (火)
中級コース F日程	2019/1/16 (水)
アップデートミーティング	2019/2/14 (木)

おつかれ様です。

会場では、ジョーホー君の元ネタになっている人に出会えるかも？

1,000人目の合格者はあなたです！会場でお会いできることを楽しみにしています。



見る知る学ぶ? → 参加する!

<https://www.sysadmingroup.jp/seminar/>



UNIRITA ユーザ会

第143回マネジメント研究会開催報告

平成30年9月7日(金)にダイハツ工業株式会社様にてマネジメント研究会を開催しました。施設見学では、コペンファクトリーとヒューモビリティワールドの見学を行いました。

コペンファクトリーでは、手作業で行われるコペンの組み立て工程や、テスト工程の実施をガイドの方から丁寧にのご案内いただき、ヒューモビリティワールドでは、体験型展示物などで、普段意識しない車の仕組みを体験し、改めて軽自動車の歴史と進化を教えてくださいました。

そのあとの講演では会議室に移動し、「ダイハツ工業における脱ホストに向けた取り組み」と題してご講演いただき、現状の取り組みと課題について現場目線の声とアドバイスをいただきました。

おかげさまで、27社40名の方にご参加いただき大盛況で開催終了しました。

開催にあたり、ダイハツ工業様をはじめご協力をいただいた皆さまに感謝を申し上げます。



第52回東日本ITフォーラム開催のお知らせ

平成30年10月19日(金)に、第52回東日本ITフォーラムを開催します。今回は、三菱UFJインフォメーションテクノロジー株式会社様より講師をお招きし、「ブロックチェーンに関する取り組み」をテーマに開催します。

三菱UFJインフォメーションテクノロジー様では、さまざまなブロックチェーン基盤ソフトウェアを実際に使用して、調査と検証を実施されております。そこで得たノウハウを含め、右記のような内容をご紹介します。

- ① ブロックチェーンとは、技術概要、歴史、基盤ソフトウェアの分類
- ② ブロックチェーンの長所、課題、向き不向きエリア、適したユースケース
- ③ エンタープライズ向けブロックチェーンの仕組み (Hyperledger Fabric1.0の例)
- ④ Hyperledger Fabric1.0などの性能検証結果

ご講演後は参加者同士のディスカッションのほか、ご参加各社の情報交換の時間として懇親会も予定していますので、併せてご参加ください。

詳細はこちら

<http://www.uniritauser.jp/event/east.html>

セミナー 紹介

データ総研 特別開催セミナー 2018

「悩んできたからこそわかる データマネジメントの実践に必要なコト」

近年は企業のデータマネジメントへの取り組みが一般的になってきました。競争優位獲得のためにデータ活用を推進してみたものの、上手くいかなかった企業が「データマネジメント無くして、データ活用の成功は無し」と気づいたからです。本セミナーでは、データマネジメントに仕組み、壁にぶつかりながらも積極的に挑戦し続ける企業様にご講演いただきます。ぜひご参加いただき、データマネジメント成功のヒントをつかんでいただければ幸いです。

■日時・会場

2018年11月14日(水) 13:30 ~
アイビーホール青学会館 3F

■参加費 無料

■主催 株式会社データ総研

■URL

<https://jp.drinet.co.jp/seminar/special/201811>



パートナー様
ご紹介

SAPのデータ活用ソリューション マスターデータの整合性UP! ~データ活用実現~

株式会社アイネスが提供する「Aerps (アープス) MASTER Ace」は、SAP ERPおよびSAP S/4HANA (以下:SAP)のマスターデータ管理において課題とされている「作業負荷」や「整合性保持」を解決することを目的としたマスターデータ管理システムです。マスターデータを高い精度で継続的に維持することができます。データ活用基盤を整えた上で、ユニリタの「Waha! Transformer」と組み合わせることで、企業活動に活用効果の高いデータ分析が可能となります。

データ活用における課題

企業が躍進するためには、基幹データを活用し、企業活動に反映させることが不可欠ですが、データ活用を実現するためには障壁となる課題があります。

三大課題

課題①	SAPのマスターデータが整備されていないため、精度の高い情報活用ができていない
課題②	SAP以外のデータも含め、データ連携のためのプログラム作成や、手作業によるダウンロードに工数がかかる
課題③	母体データが大量件数の場合、連携処理に非常に時間がかかる

課題解決へのステップ

ステップ1 SAPデータ品質の確保

SAPに限らず、データ活用を行うためには、データが正確であることが必須です。特にマスターデータは、トランザクションデータを活用する上でベースとなる重要なデータであり、このマスターデータを高品質化し、継続的に維持していくことが重要です。

Aerps MASTER Aceの代表的な特長

1 Quality 品質向上	優れた操作性	画面の集約や入力の簡易化・補助機能 操作性を向上させるインターフェース
	整合性の確保	ビジネスロジックに合った整合性チェック 関連マスター間の整合性チェック機能
2 Cost 運用コスト削減	ワークフロー	メール通知を主体としたワークフロー 直列・並列ルートが可能
	内部統制強化	監査ログ出力機能 職務分掌による入力表示制御
3 Control 内部統制強化	パラメータ制御	パラメータ設定により各種制御が可能
	多言語対応	グローバル展開を考慮した多言語対応

ステップ2 データの抽出・加工・連携

データを活用するには、基幹システムであるSAPからのデータ取得はもとより、関連する他システムからもデータを抽出し、必要な形式への加工、そしてBIやDWHへの連携を行う必要があります。この抽出から連携までを短時間かつ、短いサイクルで行えることが、目まぐるしく変化する市場への対応に必要不可欠です。



ステップ3 継続的なデータ活用サイクルの実現

企業のデータ活用は、1回だけでは限りません。ベースとなるデータの品質を維持しつつ、これを必要なサイクルで素早く取り出し分析することが肝要です。これには、データ品質の維持と高速にデータ抽出・加工・連携を行うことが必要となります。



今後に向けて

アイネスの「Aerps MASTER Ace」と、ユニリタの「Waha! Transformer」を組み合わせることで、データ活用における課題解決のステップを進めることができると考えます。



SAPデータ活用に取り組まれているお客様に対し、アイネスとユニリタは、得意分野のソリューションを組み合わせ課題を解決し、正確なデータをベースとしたデータ活用実現に向けて支援をしております。

株式会社アイネス
ITソリューション本部 営業部
TEL: 03-6261-3404 Mail: itsales@ines.co.jp

Aerps MASTER

検索